『十里霧中』

――息子たちのイギリス公立校体験記(6)――

豊田　一秀

この十一月号の原稿を書いている現在は七月中旬である。息子たちの学校も年度末を迎え、イギリスでの二年目の学校生活を終えた。早いもので、私たち家族もこの地に暮らし始めてほぼ二年が経つ訳である。息子たちは十六と十四になった。日本にいれば、高校二年生と中学三年である。

これまでの連載では、主に息子たちの通っている学校の行事や授業を中心に述べてきた。当初の心積もりでは、もう少し子どもたちの葛藤や家族の悩みなども含めて述べる予定でいたのだが、生活の渦中にある事柄は、なかなか文章にできなかったことを白状しなければならない。今回、ちょうど良い節目でもあるので、子どもたちの生活と心模様にも触れて、これまでの生活を少し振り返って見てみたい。

イギリスの学校に通い始めてから、先生や親しいイ

ギリス人に、子どもたちは学校に落ち着いたか、と良く聞かれる。当然ながら、「落ち着く」と言っても様々なレベルがあると思う。細かく考えれば、初期の落ち着きだけを見ても、校舎の配置が分かる、学校の雰囲気が分かる、同級生や担任が分かる、自分の名前を同級生や先生に覚えてもらう、時間割りが分かる、学校の色々なルールが分かる、会話の中の単語が耳に残るようになる、といったように実に様々な落ち着きの過程があったのだと思う。今、息子たちはどの程度の「落ち着きの過程」にあるのだろうか。だが、そう考えている内に、落ち着きの「ゴール」なるものはあるのだろうかと思い当った。まさか全くのイギリス人になることが、そのゴールとは言えまい。

こうして考えていくと、どこに暮らしたとしても同じようにそこでの生活というものがあり、その日々の中で悩みや成長があるという至極当り前の事実に気付かされた。ただ、外国で暮らす場合は、それまでの生活との差が大きいので、「落ち着く」という言葉で「生活」を表すことが多いのだと思う。

例えば、こんなことがあった。ある日、学校から手紙が来て、読んでみると、英語の特別な援助をしてくださっている女の先生に対する長男の態度が悪いので、私に学校まで来て欲しいとのことであった。こんな呼び出しは未だかってなかったことなので、緊張して出かける。直接話を伺うと、せっかく教えようとしているのに聞こうとしない、質問にも答えず無視する、言ったことを家でしてこない、といったクレームを聞かされた。そして、事もあろうに先生が注意すると長男が、I HATE YOU！（お前なんか嫌いだ！）と面と向かって言ったそうで、その中年の女の先生は切れてしまったようだ。せっかく特別の経費を使って、特別に教えてあげているのにというニュアンスが感じられた。先生の話ももっともなことなので、その場では、本人がまだHATEの持つ言葉の強さを良く分かっていないと思うので家で良く話しておく等と、長男の無礼を謝り、気長に見てくださるようお願いし

てきた。

家に帰って、今度は長男から先生のことを聞くと、傲慢で、押し付けがましくて、デリカシーのない、とても嫌な先生だという。当時十四歳だった長男は、二年ほど前から大きく心の変化を見せ始めていた。自分が良い子でいるのをやめ、感情の起伏が激しくなり、人に対する好き嫌いが強くなってきていた。真の自分を捜す旅の始まり、正に思春期の入口といった感じであったのだ。このトラブルは親としては全く迷惑な事であったが、長男が否定的な気持ちを外に現す体験を持てるようになった事自体は悪いことではないと思った。問題はその現し方であろうが、それは、本人がこれからいろいろな経験や失敗を通して身に付けていくより道はなかろう。即ち、この種のトラブルは日本にいても同じように起こしていただろうと想像された事であった。この小事件の顚末は省くが、その先生が幸か不幸か、しばらく後に転出されるまでは大きないさかいもなく、師弟共々耐えていたようである。これも「落ち着く」の一つかもしれない。

次男の方は、こんな長男の変化を身近で見ているせいか、学校では良く勉強とスポーツをする真面目な生徒、家では少々甘えん坊の家族の盛り立て役という感じになった。幼い頃の性格であった気性の激しさもまだちゃんと持っているようで、本人は余り無理をしているという訳でもなさそうである。

異国の田舎に家族四人で暮らすようになって、改めて感じるのは家族という存在が有機体であるということである。一人のコンディションが全員に影響し、家族の弱くなった部分を他に補うような動きが出てくる。子どもが小さかった頃、一人が叱られると、もう一人がいつになく良い子になってしまったりした事が思い起こされた。反面、いさかいの時など、お互いに逃げ場がなくて息が詰まるような気持ちがすることもある。私は、家族それぞれが無理をせずに居心地良く過ごせるように心を配ったつもりであるが、当然のことながら私も家族に実に多く助けられた。日本にいて

も家族の基本的な関係や役割は変わらなかったであろうが、外国で暮らすということは四人乗りのヨットで大洋を航海しているようなもので、皆が助け合わないとヨットはすぐに波にのまれてしまう。

さて、「落ち着く」に話を戻してみよう。現在、長男は学校の友達と英語で長電話をし、休みにはやはり友達とロンドンに買い物に行ったりしている。地域のプロバスケットボールクラブのジュニアチームに入って、今年は全英で八位になった。次男は、やはり休日には友達と町に出たり出来るようになり、地元のサッカーチームで活躍して見事にリーグ優勝に導き最優秀選手に選ばれた。二人とも遊びの英語には困らないと言った状態であろうか。外から見れば「落ち着いてき」たといえるのかもしれない。しかし、二人には様々な悩みがあるようである。日本の仲間と比べて勉強が遅れていること（実はこのおかげで助けられたわけだが）、もっとスポーツをしたいこと、高校や大学をどうするかということ、将来のこと、その以前に、なぜ勉強をしなければいけないのかということ、もっと色々なイギリス人と出会いたいこと。日本の友達に会いたいこと、そして自分の意思で外国に来たわけではないことへの不満、等々思い巡らしているのだろう。

息子たちの友達を横から見ていて思うのだが、日本での友達に比べて質素で幼い感じがする。持っている物を見ても、日本で流行っているらしいポケベルや携帯電話などは夢のまた夢で、音響製品も日本人の子どもにくらべれば持っている子が少ないし、また持っていても普及品である。勿論、ここでも飲酒、麻薬、夜遊び、異性交遊、そして就職難など問題は大きいのだが、塾も受験地獄もなく、日本的な忙しさはない。ゆっくりと時間の流れるこんな環境の中で過ごしながら、息子たちにはゆっくりと悩んで、そして自分で納得の行く答えを見つけて欲しいと私は思う。

イギリスの子どもの生活がゆっくり流れることについて述べてきたが、これは何も子どもの生活に限ったことではなさそうである。イギリス人がどこにでも列を作り、またそれをきちっと守ること、信号が黄色の時、必ず車が停まること、微笑みで挨拶を交わすこと等、日常の中でもイギリス人がせいていない事を感じさせられる。

平日の公園に行ってみると、父親が二、三歳の子どもを連れて散歩をしている。子どもが膝までの池に入った後、濡れた衣服の後始末をする父親の手際は、なかなか見事である。ああ、のんびりしていていいなーと思って後で話をしてみると、その父親は失業中であったりする。これがまた、イギリスの難しいところである。

私も息子たちの散髪をいつもしてやっている。彼等にしてみればイギリスの床屋に行くよりも文句が言えるところが良いらしい。十六歳と十四歳の子どもの髪を刈らせてもらえる光栄？　をかみしめながらも、公園で会ったあの若い父親を思い出していた私であった。

さて、私達のボロヨットの旅も、もうしばらく続きそうである。昨年の十月より隔月に連載を始めた『十里霧中』であるが、霧も晴れぬままに、ひとまず今回で区切りにしたい。これまでの連載を読んでくださった方々に心より感謝申し上げる。

先日、息子たちは二人で日本に発った。三週間だけだが、二年ぶりの日本である。久しぶりに友と会い、語り、何を感じてくるのであろうか。自分たちの成長を体感できるような旅であったらと私たちは願っている。変な髪型だと笑われなければ良いが……。

（元お茶の水女子大学附属幼稚園）